

ラテン教父の総合研究

アフリカの司教殉教者キプリアヌス(6)

『死を免れないことについて』……翻訳と注釈……

Cyprianus, *De Mortalitate*.

吉 田 聖

1. 解説：キプリアヌスの著書 *De Mortalitate* と当時のアフリカの状況。

M. Simonetti の序言を参考にしながら、当時の状況を紹介することから始めたいと思う。舞台は、今から約 1740 年も前の西暦 252 年頃のアフリカである。当時のアフリカ（エジプトやアレキサンドリア）では致命的な伝染病のペストが蔓延し、至るところで多数の患者や死者を出し、人々は悲嘆にくれていた。人々は昔、異教徒もキリスト者も、次々とこの悪疫に襲われるのを見て、多数の信徒達は非常に心の動揺をきたし、自分が感染するのを恐れただけでなく、親しい人々の死や自分の財産消滅についても不安と恐れを抱いて悩んでいた。この悪疫の嵐のさなかにあってキプリアヌス司教は、司牧的な配慮から虚偽の主張を排除し、信徒の心を捕らえていた恐怖心を除去するために、本書『死を免れないことについて』を書いたのである。彼はこの教書の中で、地上では肉体上のあらゆる不都合なこと〔たとえば病気にかかり、苦しみ、やがて死ぬこと等〕はキリスト者も他の人々も皆同じであること、ただ異なる点は肉においてではなく、その精神においてであることを力説している。つまり私達キリスト者は、この世を捨てたこと、そしてこの世ではほんのしばらくの間だけ、客人として、また旅人として暮らしていることを繰り返し思い起こし、考えていなければならないこと、さらに、私達一人ひとりがその永遠の住処を定める日……即ち、この地上から取り去られ、この世のわなから解放され、楽園である御国に呼び戻される日……を恐れずに、むしろ喜び迎えるようにしなければ

ばならない、と教え諭しているのである(M. Simonetti, Praefatio. および本文 26 章参照)

本書作成の動機については、カイサレア生まれの教会史家エウセビオス Eusebius (265-340?) の著者 Chronicon 『年代記』の中でも言及されており、「ペストが世界中に、特にアレキサンドリア、エジプトに蔓延した時、ディオニシウスも証言しているとおおり、キプリアヌスは 252 年に『死を免れないことについて』という本を著した」と。

2. *De Mortalitate* 『死を免れないことについて』 という表題について。

本書の翻訳にあたっては、Corpus Christianorum Series Latina, Sancti Cypriani Episcopi Opera, Pars II(ed. M. Simonetti, 1976)をテキストとして使用した。そこには 13 種の写本(6 世紀から 12 世紀にかけて作られた写本〔略号: S, O, P, W, Y, G, D, R, h, p, e, a, V〕と 2 つの版〔v, Hart.〕)による原文との相違箇所が逐一本文下に注記されている。たとえば表題についても、*de mortalitate* とある写本は上記 13 書中 S, h, a, の 3 書で、*incipit de mortalitate* とあるのは写本 W, Y, P, D, R, p の 6 書で、*incipit caecilii cypriani de mortalitate* とあるのは、写本 O, G, の 2 書であり、写本 e には表題が載っていない。ただし、翻訳にあたっては、M. Simonetti 版を基にして行い、これらの写本の相違箇所は参考にする程度にとどめた。

Mortalitas というラテン語については、一般には「人間の死ぬべき運命・はかないこと、無常、生者必滅、現世、人間、致死性、死亡率等」の種々の意味があり、やや暗い印象を与えるかも知れない。キプリアヌスがこの言葉をあえて表題にまで用いたのは、上述の説明および本文からも明らかのように、mortalitas 「死を免れないこと」に力点を置くためではなく、猛威をふるうペストに命を奪われることになっても、恐れることはない、人間はこの世に永住の地を持たないのであり、キリスト者の最終目的地は、神のもとでの「永遠のいのちと喜び」からなる「不滅」Immortalitas であ

る点を強調したかったためであろう。

3. 本書の構成について。

De Mortalitate 『死を免れないことについて』は前回訳出した*De Opere et Eleemosynis* 『善行と施しについて』〔南山神学, 第12号, 1989年参照〕と同様に、全体は26章からなっているが、前著同様、小見出しなど一切付いていないので、内容を検討したうえで、下記のように、各章の内容を示す小見出しを付けてみることにした。

- 第1章 本書作成の動機：疾病蔓延で動揺している人々への激励
- 第2章 予告されたこの世の災難と、その後のすばらしい救いの約束
- 第3章 義人シメオンの信仰の模範と不死への希望
- 第4章 この世は日々の戦いの場であり、油断してはいけない
- 第5章 キリストにまみえる希望をもって、その喜びへと急ぐ
- 第6章 真実な神の言葉に対する、誠実な信仰の大切さ
- 第7章 この世を去ることは永遠の救いへの旅立ち
- 第8章 この世では信者も他の人々と共通の肉体的な不利益を受ける
- 第9章 キリスト者は艱難にあつて、人一倍忍耐強く戦う
- 第10章 旧約聖書のヨブとトビトの信仰と忍耐の模範
- 第11章 艱難にあつても、眩かす忍耐し勇敢に持ち堪える
- 第12章 旧約聖書アブラハムの信仰と私達の挑戦
- 第13章 使徒聖パウロの試練と忍耐の模範
- 第14章 信仰を証明するために役立つ試練の具体例
- 第15章 死すべき定めが各人にもたらす良い結果
- 第16章 悪疾とそれに関わるすべての人々の反省点
- 第17章 疾病と殉教の機会について、殉教は神からの恵みである
- 第18章 神のみむねの実現を祈りながら、それを拒む私達の言動
- 第19章 臨終の一司祭に対する神の叱責と人々への警告

- 第20章 死者はすでに神のもとに到達し、生きている！
- 第21章 キリストのうちに復活することを希望する信仰
- 第22章 死は終わりではなく通過であり、移動である！
- 第23章 旧約聖書のエノクの例：この世からの速やかな解放を願う
- 第24章 死を嘆き悲しむのではなく、その日の到来を喜び迎えること
- 第25章 疾病の蔓延している現代を、正しく冷静に判断すること
- 第26章 旅人が故郷に戻る日として、死を喜び迎えよう！

以 上

4. 本書の翻訳の意義と最近の日本の状況。

本書の翻訳に着手して間もない頃の1988年秋、昭和天皇が病気で入院、111日の長い長い闘病生活の後、1989年1月7日崩御され、64年で昭和時代は幕を閉じた。昭和天皇入院から葬儀前後までの長い間、日本中は自粛の名の下に異常な迄の緊張と不安な懸念に包まれ、崩御と同時に司教団も特別声明文を発表してカトリック教会の立場を説明するほどであった。とにかく、どんなに手厚い看護と最新の医学的な治療や輸血を重ねても、「人は必ず何時かは死を迎えるのだ」ということを、人々は痛感させられた。そして昭和天皇の戦争責任を問う声も上がり、言論の自由を抑圧する動きも見られ、なお一層議論も盛んに行われた。

“Pallida mors aequo pulsata pede pauperum tabernas regumque turres.” 「蒼白い死は、等しい歩みで、貧しい人の小屋と、王者の城塔とを訪れる」(Hor. Carm. I, 4, 13)という言葉がその間にも度々脳裏に浮かび、わたしにとって、死の準備教育のよい機会ともなった。その後も、『死を免れないことについて』というキプリアヌスの教えを黙想しながら翻訳作業を続けた。「大葬の礼」の日(1989年2月24日)にも翻訳作業を続け、最後の数頁は「受難の日曜日」(1989年3月10日)から聖週間、そして復活祭(3月26日)の朝までかかって完了した。復活祭の朝、終章(26

章)を訳し終えた時は、何とも言えない喜びと感謝の心でいっぱいであった。

ところが翌日、敬愛する富沢・前札幌司教の訃報を耳にした。師は聖木曜日の式に参列後、容体急変し、復活祭の日に帰天されたようで、まさにキリスト者としては、これ以上のものは願っても考えられないほど素晴らしい最期であった。〔実は、師が京都の西陣教会・主任司祭時代に、1950年より4年間、私の家族は西陣教会内に住まわせていただき、父(吉田 修、1975年1月6日帰天)は伝道士として働き、母はコックをつとめ、当時、小学生であった私は侍者少年であった。師との出会いによって私は司祭職への道に導かれたと言っても過言ではない。〕1989年3月30日札幌・藤学園での葬儀ミサに参列し、永遠の安息を祈念した。また同年9月15日には西陣教会・聖堂献堂40周年記念式典に参加、40年ほど前に侍者をした祭壇で共同ミサを司式する恵みをいただき、ありし日の師の遺徳を偲び心から感謝を捧げた。

そういうわけで、今回の翻訳書……すべての人にとって重大な関心事である、いのちの終末について示唆に富み、司牧的な指針に満ちている本書、アフリカの司教殉教者キプリアヌスの『死を免れないことについて』……を、心からの感謝をこめて故富沢司教の霊前に捧げたいと思う。

5. *De Mortalitate*. 『死を免れないことについて』 ……翻訳と注解……

1. 親愛なる兄弟達よ。大多数の皆さんは、しっかりした心と、確固たる信仰と、献身的な精神を持っておられるので、頻繁に生じている死という現象に取り乱されることなく、かえって頑丈で、どっしりとした岩のように、この世と時世の荒波の激しい攻撃に打ち砕かれずに、逆にそれを打ち砕き、誘惑に打ち負かされずに、逆に試みを受けてきたのです。しかしながら、それにもかかわらず、人々の中には、心の弱さから、あるいは信仰の腐敗から、あるいは今の生活の快適さから、あるいは好色軟弱さから、

そしてさらに重大なことには、真理の誤謬に対して、あまり勇敢に踏みとどまらずに、自分の心中にある「神の無敵の力」を活用しない人達が何人もいることに私は気付いています。この状態は偽装したり、黙認したりすべきものではありません。私は微力ながら全力を尽くして、また主の教えから集めた訓話をもって、享乐的な精神から生じた怠惰を、粉碎しなければなりません。そして、神のもの、キリストのものとなり始めた人は、神とキリストに相応しいものにならなければなりません。

2. 親愛なる兄弟達よ。神のために戦っている人は自分が天の陣営にあって、すでに神のことを志しているものと考えなければなりません。それによって、主も予め到来することを語っておられるのですから、この世の嵐や旋風がやって来ても恐れおののくことなく、妨げられることもないでしょう。主は先を見越した励ましをもって、主の教会の人々に、やがて到来するすべてのことに耐えるように導き、教え、覚悟させ、強めて下さっています。主は戦争、飢饉、地震、ペストが至る所に起こることを話しておられます。また思いもよらなかった新しい偽りが私たちを動揺させないように、最後の時には災いがさらに重なり起こって来ることも、予め警告されました。

ご覧なさい。語られた事は起こっています。そして起きたことは、前もって語られた事でしたから、約束された事も必ず続いて起こるでしょう！主ご自身も次のように言われ、約束されたのです。「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」¹⁾

愛する兄弟達よ。神の国がもう存在し始めたのです。いのちの報酬・永遠の救いの喜び・永久の歓喜・(かつて失った)楽園の所有が、この世が過ぎ去る共に、もう手元に来ているのです。天上のことが今や地上のことに取って変わり、些細なことが偉大なことに、消え去ることが永遠のことに取ってかわったのです。どこに心配や懸念の入り込む余地がありますか。こうした事柄のさなかにあって、信仰と希望のない人以外に、恐れた

り、おののいたりする人がありましょうか。死を恐れる者は、キリストのもとに行くことを望まないものの特徴なのです。キリストのもとに行くことを望まない者は、キリストとともに支配し始めることを信じていない者の特徴なのです。

3. 「正しい者は信仰によって生きる」と聖書に書かれてあります²⁾。もしもあなたが正しい人で、信仰に生きており、神を本当に信じているならば、キリストと共にいることにもなり、主の約束に固められているのですから、キリストに呼ばれているという確信を持ち、悪魔から解放されているということを、喜んでいいはずではないでしょうか。義人シメオンは確かに正しい人で信仰があつく、神の掟を守っておりましたが、彼はキリストを見るまでは死なないと、天から約束を受けていました。そして幼子キリストが聖母と共に神殿参詣に来られた時、前もって語られたキリストがもうお生まれになったと、彼は霊に導かれて悟ったのでした。そしてキリストを見た時、彼は自分が間もなく死ぬことも悟ったのです。それで、彼は今、死がまじかに迫っていることを知り、確かにすぐに召されると喜びながら、幼子を両腕に抱き主を賛美して、叫んで言ったのです。「主よ。今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいませ。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」³⁾

この言葉は、神の僕たちがその時、平和と自由で静穏な安息を得たことを証明し確認しているのです。つまり私達もまた、この世の嵐・旋風から引き上げられる時、永遠の安息の港・母港へと急ぎ、この世の死が完成する時、私達は不死に到達するのです。これこそ私達の平和であり、信頼に満ちた穏やかさです。これこそ堅固にして揺るぎなき、永久不変の安らぎなのです。

4. しかし、このこと以外は、この世はむしろ悪魔に対する日々の戦いの連続にはかならず、その攻撃と武器に対する不断の戦いに過ぎないのではないのでしょうか。私達の戦いは貪欲・不貞・怒り・野心との戦いであり、私達の苦労と努力は肉欲とこの世の誘惑に対するものです。人間の心は包

囲まれており、あらゆる方面から悪魔の攻撃に取り巻かれていて、ほとんどの点からもその攻撃を受け、辛ろうじてそれに抵抗しているのです。一方で貪欲を降伏させれば、他方で色欲が起き、色欲が征服されると野心が所をかえて起きるのです。野心が押し伏せられると、今度は怒りが爆発し、傲慢が高まり、大酒が誘惑し、恨みが平和を破り、妬みが友情を断ち切るのです。そこで、あなたは神の掟で禁じられている呪いの言葉を吐かざるを得なくなり、許されていない言葉を口にせざるを得なくなるのです。

5. 毎日、非常に多くの人の心は迫害で苦しみ、その胸は危険に苛まれています。それなのに、この世、即ち悪魔の剣のさなかに、長く留まることを喜ぶのでしょうか？　早めに死んで、キリストのもとに馳せ参じることを熱望し、期待しなければならないはずで、主ご自身も私達に教えて、こう言われました。「はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」⁴⁾ 悲しみのない状態を望まない人がありましょくか？　この喜びに到達しようと急がない人がありましょくか？　私達の悲しみがやがて喜びに到達する時、主はさらにこう宣言して、言われるのです。「しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」⁵⁾

従って、「キリストにまみえること」が喜びであり、また「キリストにまみえること」以外に私達の喜びは有り得ないのですから、この世の苦悩や罰や涙を愛して、奪い去られることがない喜びへと急がないということは、何という心の盲目さでしょう！　また何という愚かなことでしょう！

6. しかしながら、愛する兄弟達よ、こういうことが起きるのは、信仰が無いからなのです。神は真実なかたであるから、その約束も真実であること、そして神の言葉は信じる人々には永遠に変わることはない堅固なものであることを、誰も信じていないからなのです。もしも尊敬と賞讃に値する人物が何かを約束した場合、あなたは約束しているその人に信頼するでしょう。その言動には間違いがないと思っているその人から、あなたは

決して嘘をつかれたり騙されたりはしないと承知していることでしょう。

ところが、今、神があなたに語りかけているのです。そして、あなたは不信仰な心で、不誠実にもためらっているのですか？ あなたがこの世を離れる時、神は不死と永遠を約束しておられるのに、あなたはそれを疑うのですか？ これは、神を全然知らないということです。これは、不信仰の罪でもって、信じる者の師であるキリストを侮辱することです。これは、教会即ち「信仰の家」にありながら、信仰の基礎を持っていないということなのです。

7. この世から立ち去ることは、どれほど大きな利益になることでしょう。私達の救いと利益になることを説く師であるキリストご自身、こう示しておられます。即ち、自らが間もなくこの世を去ることを告げられたので、弟子達が悲しみだした時、彼らに言われました。「わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。」⁶⁾

主はこれによって、私達にとって親しい人々がこの世を去って行く時には、悲しむよりも、むしろ喜ぶべきことを、教え諭されたのです。

このことを記憶していた聖パウロはその書簡の中でこう書き記して言っています。「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」⁷⁾ もはやこの世の罫に捕らえられず、もはや肉〔欲〕のいかなる罪や悪徳にも耽ることなく、はげしい苦悩から免除され、悪魔の毒牙(どくが)から解き放たれ、キリストの招きに応じて永遠の救いの喜びに向かって旅立つことを最大の利益だと、彼は考えているのです。

8. しかしながら、この病〔悪幣〕の力は、異教の人々と同様、私達の或る人々にも影響を及ぼしています。つまり、キリスト者でも、「この世の悪との接触から免れて自由になり、この世のいのちを幸せに享受すればよいのであって、何もこの世であらゆる逆境に耐えながら、あの世の喜びのために取っておくこともない」というようなことを、信じてしまったかのようになっています。「死を免れないこと」が私達と他の人々に共通であるということ自体が、ある人々に悪い影響を及ぼしているのです。しかし、

この世において私達と他の人々とに共通でない事柄についても、ここで最初の誕生〔人間として生まれ生きていること〕の法則に従って、共通の肉体が残っている間は、どういう違いがあるのでしょうか？ この世に生きている限り、私達は同じ肉体を持つ人類と交わっているとはいえ、霊においては分かたれているのです。従って、この「腐敗し易いもの」が「腐敗しないもの」を纏い、この「死すべきもの」が「死なないもの」〔不死〕を受け、聖霊が私達を父である神にまで導いて下さるまでは、私達にとって肉体の不利益はどんなものであれ、人類と共通のものなのです。

このように、私達がこの世において他の人々と共通のこの肉体によって支えられている限り、大地が不毛の収穫によって瘦せかけてしまうと、飢饉を免れる者は誰もいなくなり、また、敵が侵略してある町を占領すれば、〔住民は〕皆、一度に捕虜となり略奪さるのです。さらに、静穏な雲が雨〔雲〕を抑えれば、皆が皆旱魃に見舞われるし、また、ごつごつした岩が船を粉碎すれば、航海する人々に例外なく共通しているのは難破なのです。また、私達にとって、目の病気や熱病の攻撃、体のあらゆる部分の健康状態も、他の人々と共通のものなのです。

9. さらに、もしも、どのような条件で、またどのような掟のもとで信じてきたかをキリスト者がわきまえて、それを固守するならば、この世においては、悪魔の攻撃に対して人一倍戦うべきであるため、他の人々よりも苦勞しなければならぬことも承知していることでしょう。聖書は前もって、こう教えて言っています。「子よ、主に仕えるつもりなら、正義と敬虔のうちに立て、そして自らの魂を試練に向けて備えよ。」⁸⁾

そしてさらに、「身にふりかかる艱難は、すべて甘受せよ。たとえ屈辱を受けても、我慢せよ。金と銀は火で精錬される。〔人は屈辱のかまどで陶冶される〕。」⁹⁾ と言っています。

10. こうしてヨブはその富を失い、子供たちに死なれて後、腫れ物や蛆虫にせめ苛まれましたが、屈することなく持ちこたえ、その苦闘と苦悩のさなかにあつて、信仰に満ちた心の忍耐を示しながら、こう言いました。

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」¹⁰⁾。また、彼が激しい苦痛のために耐え切れなくなった時、神に対して不平や恨みの言葉を吐くように勧めた妻に向かって、ヨブは答えて言いました。「『お前まで愚かなことを言うのか。わたしは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。』このように、どんなことが彼に起こっても、ヨブは唇をもって神の前に罪を犯すことをしなかった」¹¹⁾。そこで主である神は彼に証明を与えて、こう言われたのです。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどのものはいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」¹²⁾

また、トビアは素晴らしい行いをし、数々の慈善と栄誉ある模範を残した後に、失明してしまいましたが、逆境のさなかにあっても神を畏れ、その肉体の苦しみを乗り越えて神をますます賛美したのです。その彼に対して妻は道を踏み外させようとして「どこにあなたの正義があるのですか。ごらん下さい、あなたの受けている苦しみを！」¹³⁾と言ったのです。

しかし、彼は神への畏敬に関しては、しっかりとして揺るがずに立ち、あらゆる苦しみに対しては信仰の心で武装し、苦しい時に弱い妻の誘惑に負けず、かえって大いに忍耐することによって、いっそう神によみせられたのです。のちに天使ラファエルは賞讃してこう言っています。「神のもろもろの御業は畏敬の念をもって明らかにされるべきです。さて、[今だから言うが、]トビトよ、あなたが祈り、サラが祈ったとき、その祈りが聞き届けられるように、栄光に輝く主の御前で執り成しをしたのは、だれであろうわたしだったのだ。あなたが死者を葬っていたときもそうだった。あなたが食事にも手をつけないで、ためらわずに出て行き、死者を手厚く葬ったとき、わたしは試みるためにあなたのもとに遣わされて来たのだ。神はまた、あなたと嫁のサラをいやすためにわたしをお遣わしになった。わたしは、栄光に輝く主の御前に仕えている七人の天使の一人、ラファエルである。」¹⁴⁾

11. 正しい人達はこの忍耐を何時も持ち続け、十二使徒達もこの戒めを

主の掟として受けとめ、艱難にあっても呟くことなく、この世で起こる事はどんなことであれ、勇敢に、かつ忍耐強く受けとめたのです。しかし、ユダヤ人はこういうことにぶつかると、頻繁に神に対して呟いたことを、主なる神は民数記の中でこう証言しています。「わたしに対する不平がやみ、彼らが死ぬことはない。」¹⁵⁾

愛する兄弟達よ。私達は艱難にあつて呟くべきではないのです。かえってどんなことが起こっても、忍耐強く、勇敢に持ちこたえるのです。〔聖書に〕こう書かれているからです。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。」¹⁶⁾

さらにまた申命記にもモイゼを通して聖霊はこう語っています。「主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわちご自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。」¹⁷⁾ さらに、こうも言われたのです。「あなたたちの神、主はあなたたちを試し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたたちの神、主を愛するかを知ろうとされる。」¹⁸⁾

12. アブラハムもこうして神をお喜ばせしたのです。神をお喜ばせるためなら我が子を失うことも恐れず、「子殺し」さえも彼は拒まなかったのです。〔ところで〕あなたは、死を免れないという定めと運命に従って自分の息子が死んでいくことにさえ耐えられないのに、もしもわが子を殺すように命じられたりしたら、一体どうするでしょうか。あなたは神への畏敬と信頼の心で、覚悟を整えて万事に対処しなければなりません。たとえそれが個人の財産の消失であろうが、苦しい病気でからだ中が絶えず苦しいめにあうことになろうとも、死によって妻子や親しい人達をもぎ取られるような悲しみに遭遇することになろうとも、それらのことであなたが躓かされるようなことはなく、かえって戦うのです。キリスト者の信仰を弱めたり砕いたりせず、かえって現在のあらゆる困難による不正は将来の善の保証によって軽減されるべきものですから、むしろ困難のうちにあつて自分の善徳の力を示さねばなりません。まず戦いがなければ、勝利も有り得ないのです。戦いが実際に行われてこそ、はじめて勝利の冠も勝者に授

与されるのです。〔船の〕舵取りは嵐においてこそ認められ、兵士〔の〕勇気は戦場で証明されるものです。危険が何もないなら、それは「たのしいお遊び」に過ぎず、艱難にあって悪戦苦闘することこそが、真理の証明なのです。深く根を張った木は風に吹かれても揺らぐことはありません。堅固な木材で作られた船は波に打たれても砕けたりしません。また、脱穀場で穀物を打つ時強くて固い粒は風に吹き飛ばされないが、空っぽの籾殻（もみがら）は吹きつける風に運び去られてしまうのです。

13. こうして使徒聖パウロは、難破した後も、鞭打たれた後も、生身の体に対する数多くの、ひどい苦難の後にも、自分が傷めつけられるよりも、かえってその逆境によって、自らをあらためることが出来、ひどく苦しめられている間に、よりいっそう正しく〔信仰を〕証明することになったと言っているのです。「それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。』¹⁹⁾

従って、弱さや無力なこと、荒廃などに捕らえられた時こそ、私達の勇気の力は完全なものとなるのです。信仰も試練に踏み堪えてこそ、栄冠を受けるのです。聖書にこう書き記されている通りです。「かまどは陶工の器を試し、艱難の試練は正しい人を試す」²⁰⁾

つまり、このことが私達と神を知らない人達との違いなのです。即ち、彼らは不幸〔逆境〕にあうと咬いたり不平不満をぶちまけるが、私達はそれによって勇気を失ったり信仰の真理から引き離されることなく、苦しみのさなかにあって、かえって強められるのです。

14. こういうこと〔信仰を証明するために役立つ試練〕は、いろいろあります。たとえば、腹部内の流血で体力を消耗してしまうこと、喉の傷に生じた、骨髓に達するほどの火〔のような高熱と痛み〕に焼かれること、

連続的な嘔吐による腸の痙攣に悩まされること、血液の力で両眼が真っ赤に燃える〔充血する〕こと、足または体の一部が悪疾に感染して朽ち落ちること、或いは歩行困難をきたしたり、或いは聴覚障害を起こしたり、或いは視覚がきかなくなったりして、身体の一部を消失または破損したりすることによって突然襲われる苦しみなどは、信仰を証明するために役立つ試練なのです。これほど多くの荒廃や死の攻勢に対抗して、揺るぎない心で全力をあげて戦うことは、何と偉大な心〔の持ち主〕でありましょう！

人類の荒廃のさなかにあって真っ直ぐに立ち、神に希望をおかない人々と共に敗れて倒れることなく、むしろ喜びながら「時の賜物」として抱きしめることは、なんとすばらしいことでしょう！ 私達は自分の信仰をしっかりと示しながら、苦難に耐えてキリストの〔歩まれた〕狭い道を通してキリストのもとへ進み、その裁きに従って、彼の道と信仰の報いを受け取るのです。

水と聖霊とによって新たに生まれず、ゲヘンナ〔火の地獄〕の火に投げ込まれる者は、確かに死を恐れるに違いありません。キリストの十字架と受難のうちに記名登録されていない者も、死を恐れるに違いありません。この世の死から「第二の死」に移り行く者も、死を恐れるに違いありません。この世を去れば、あとは消え去ることのない火の「永遠の罰」に苦しめられる者も、死を恐れるに違いありません。そして、死のうめきと苦しみをしばらく後回しにしたとしても、死の時をほんの少し引き延ばしただけの者も、死を恐れるに違いありません。

15. 私達のうちの多くの者は、この世の「死すべき定め」に従って死んで行くわけです。これは、私達のうちの多くの者がこの世から解放されることなのです。この「死すべき定め」はユダヤ人や異教徒やキリストの敵にとってはペスト〔災い〕ですが、キリストのしもべにとっては「救いの門出」なのです。このこと、即ち「人類は何の区別もなく、正しい人もそうでない人も死んで行くということ」は、善人にとっても悪人にとっても「死は共通のものである」と考えてはいけないのです。正しい人は憩いの

場へ招かれ、正しくない人は処刑場へ駆り立てられていくのです。信じる者には速やかに安全が与えられ、信じない者には罰が与えられるのです。

愛する兄弟達よ。私達は神の恵みに対して無関心であり、恩知らずで、自分達のうえに与えられているものを認めようともしていないのです。ご覧なさい、乙女達は、その榮譽を安全に保ちながら、強迫・誘惑・売春宿を伴ってやって来る反キリスト者に恐れることなく、平和のうちに旅立ちます。少年達は、不安定な年頃の危険から逃れ、幸いにも節制と純潔の報いを受けます。今や繊細な婦人も拷問を恐れません。死を長引かせないことによって、迫害の恐怖、迫害者の魔手と責め具の恐怖から、逃れられるからです。「死すべき定め」とその時の到来を絶えず恐れることによって、なまぬるい者は燃え、だらしなく緩んだ者は心を引き締め、怠惰な者は励まされ、背教者は帰還を、異教徒は信仰を促されるのです。「古参の信徒達」は安息に呼び寄せられ、かわって、戦争の際には死を恐れずに勇敢に戦う「新しい大軍」が戦場に集められます。彼らは「死すべき定め」の時、戦いの場に赴く者だからです。

16. 愛する兄弟達よ。そこで、この悪疾が恐ろしくて致命的なものに見えるわけですが、各人の正義と人々の心を吟味するために、これほど適切で、しかもこれほど必要なことがありますでしょうか。つまり、健康な者が病気の者を世話したかどうか、近親者はその親族を愛情をこめて愛したかどうか、主人たる者は召使達の疲労・衰弱に同情したかどうか、医師達は、懇願する患者達を見捨てたりしなかったかどうか、気性の激しい者はその憤懣を抑えたかどうか、欲張りな者はたとえ死への恐怖からであっても、その飽きることを知らない・激しい貪欲の熱を消し止めたかどうか、傲慢な者は頭を下げたかどうか、意地悪な者はその向こう見ずなことを控えたかどうか、裕福な者は親しい者等の臨終に際し何かを贈与したり、後継ぎなしに亡くなっていく者に何かを施したかどうか、ということです。

この「死すべき定め」が他に何も与えないにしても、神のしもべである私達キリスト者にとって、死を恐れないことを学ぶにつれて、喜んで殉教

することを望むようになります。これは私達にとっては「訓練」であって「葬式」ではありません。即ち、これは心には「剛毅の榮譽」を与え、死を軽んじることによって〔勝利の〕の栄冠を準備するのです。

17. しかし、おそらくある人はこう言って反対するかもしれない。「だから私は今、「死すべき定め」の中で憂鬱なのです。というのも、信仰宣言の準備をすませ、心を尽くし、勇気をこめて苦難に堪える覚悟を整えてきたのに、死を迎えても、私には殉教〔の機会〕が奪われているのだから……」しかし、殉教というものはあなたの力の及ぶ所ではなく、神の恵みのうちにあるものです。また、あなた自身受ける値打ちがあるかどうかも分からないものを、なくしてしまったなどと言うことも出来ません。さらに、人の心と腎を探り、隠れた所を調べそれを知っておられる神は、あなたを見て、賞賛し認めて下さいます。あなたのうちに徳の備わっているのを見おられる神は、その徳に報いて下さいます。

カインが神に捧げ物を供えた時、すでに兄弟を殺していたのではなかったでしょうか？ それに神はカインの心に潜んでいた兄弟殺しを予見して彼を前もって断罪されたのでした²¹⁾。悪い思いや偽りの意向は前もって見おられる神によって見抜かれているのと同じように、信仰宣言を考え、殉教を心で思い浮かべている神のしもべ達の中にある「善にささげる意向」にも、審判者である神から栄冠を授与されるでしょう。「その心が殉教ということに欠けていること」と、「殉教ということがその心に欠けていること」とは、全く別なことなのです。主があなたを召された時、見い出されるままのあなたの姿に従って、審判も下されるでしょう。それは主がこう証言して「こうして、全教会は、わたしが人の思いや判断を見通す者だということ悟るようになる」²²⁾と言われたとおりです。神が求めておられるのは、私達の血ではなく、信仰なのです。アブラハムもイサクもヤコブも殺されなかったが、信仰と正義の功徳によって榮譽を与えられ、太祖達のうちにあって最初の受賞に値する者とされたのです。信仰のある者、正しい者、賞賛に値する者はみな、その宴会の席に招かれているのです。

18. 主が毎日祈るように命じられたことに従って、私達は「自分の意志」ではなく「神の意志」「みむね」を行なわなければならないことを銘記しておくべきです。神のみむねが行われるように祈りながら、神が私達をこの地上から呼び寄せておられる時に、直ちにそのみむねの命じることに従おうとしないのは、何という本末転倒、何という不条理でしょう！

私達は抵抗し逆らい、強情な奴隷のような振る舞い方で、悲しみ嘆きながら、神のみ前に引き出されます。自由意志による従順ではなく、必然性の鎖に縛られて、あの世へと出て行くのです。そして、しぶしぶ神のみ前に進み出て、天の報いをいただくというのが、私達の望みなのです。もしもこの世の奴隷状態にあることを喜んでいいるならば、どうして私達は「み国の来たらんことを！」と祈り願うのでしょうか？もしも私達が「キリストと共に支配すること」よりも、「この世で悪魔に従うこと」を、より多く願ひ、より強く熱望するならば、どうしてこうも度々「み国の到来する日が早くなるように」と、祈り願うのでしょうか？

19. さらに、未来を予見する主のはからいは「真の救い」にこそあるということ、それを神の摂理がさらに明確に示しています。ある時私達の同僚の一司祭が病気で疲れ果て、死が近づいてくるのを心配しながら安息を願っていました。すると、その懇願しながら臨終を迎えつつあった彼の傍らに、一人の若者が栄光と威厳を帯びた荘厳な姿で、気高く、輝きをもって現れたのです。この若者が彼の側に立つ姿を肉眼で見る事が出来たのは、すでにこの世を去りかけていたこの司祭だけでした。そしてこの若者は、心と声になんとなく怒りの気持ちを表しながら、「苦しむことを恐れているのか？ この世を去りたくないのか？ 私は何が出来ようか？」と叱責して言ったのです。……この言葉は、迫害を恐れている者、自分の召し出しについて安心している者にたいして、現在の望みに満足することなく、将来のことを慮るように叱責し警告している言葉です。私達の一兄弟・臨終の一同僚が耳にした言葉は、実は他の人々に言うはずのものでした。臨終の者が聞いた言葉は、他の者に伝えるためでした。彼が聞いた言葉は自

分のためではなく、実は私達のためでした。

というのも、すでにこの世を去ろうとしている者は、〔聞いた言葉で〕何を学ぶことが出来るのでしょうか？ 彼は確かに後に残る私達に教えたのです。即ち、死期の到来が遅くなるように願った司祭が神から叱責されたことを私達が知るように、そして万事につけ役立つことは何かを私達が認めるように、と。

20. 最も小さなものであり、また最後のものである私達自身に対してさえも、こうした戒めが神の恵みによって、どれほど度々、しかもどれほど明らかに啓示されたことでしょうか！ それは私が絶え間無く証人となり、〔以下のことを〕公に述べるためです。即ち、「主のお召し」によってこの世から解放された兄弟達は、「失われた」のではなく「送り出された」のですから、彼らのことを悲しんではならないこと、さらにまた彼らは私達から離れていくのですが、「旅人」や「航海者」がするように、私達の先に行く者であること、従って彼らを熱望すべきであって悲しむべきではないこと、彼らはもう彼方の地で「白衣」に覆われているのですから、私達はこの世で「黒い喪服」など身に纏うべきではないこと、そしてこのことが異教徒達に私達を正当にしかも当然の如く非難する機会……つまり、神のもとで生きている彼らのことを、あたかも消え失せた者、見失われた者のように私達が嘆き悲しみ、話や言葉で表した信仰を心と胸で私達が証明していないなどと言い触らす機会を……を与えないようにしなければならないのです。

私達の発言が、「見せかけのもの・作りごと・にせもの」に見えたとしたなら、自分の信仰と希望の点で、私達は「二枚舌の持ち主」なのです！ 言葉で徳を説いておいて、行動で真理を否定しては何の益にもなりません。

21. 最後に、使徒聖パウロは、友人の死を嘆き悲しむ者を叱責し、非難し、咎めてこう言っています。「兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは

信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいませ。²³⁾」友人の死を嘆き悲しむ者は、希望を持たない者だと、彼は言っているのです。希望のうちに生きる私達は、神を信じ、私達のために苦難を受けて復活したキリストに信頼しています。私達はキリストによって、キリストのうちに復活する者として、どうして自分がこの世から去ることを望まないことがありますか？ また、死去した友人達のことを消え失せた者のように、嘆き悲しむのでしょうか？ 私達の神・主キリストご自身も戒めてこう言われたのです。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者はだれでも、決して死ぬことはない²⁴⁾。もしも私達がキリストを信じるなら、その言葉と約束に信頼するようにしましょう！そして決して死ぬことのない者として、いつまでもキリストと共に勝利をおさめ支配する者となるのですから、喜んで、安心して、キリストのもとへ行こうではありませんか！

22. 私達はいずれそのうちに死に、この死によって「不死」へと移ることになるわけですが、この世〔の生命〕から離れ去ることがなければ、永遠の生命を受け継ぐことは出来ません。死は「おわり」ではなく「通過」であり、永遠を目指すこの世の旅路の「道順」なのです。よりよいことへと急がない者がありますでしょうか？ キリストの姿に変容され、天の恵みの品位に早く到達したいと切望しない者がありますでしょうか？ 使徒聖パウロもこう言っています。「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形にかえてくださるのです。」²⁵⁾ 私達が将来このような者になることを、主キリストは約束して下さり、また私達がキリストと共にあり、キリストと共に永遠の住処、天の国で喜ぶことが出来るように、私達のために御父に願って言われました。「父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを

愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。』²⁶⁾

キリストの玉座、天の国の栄光の前に進み出る者は、嘆き悲しんではなりません。むしろ、主の約束と真理にたいする信仰に従って、この世からの「出発」と「移動」を喜ばねばなりません。

23. こうして、神によみせられたエノクも〔天の国へと〕移されたことを私達は知っていますが、創世記の中で証言し聖書はこう語っています。「エノクは神によみせられ、神がとられたのでいなくなった。」²⁷⁾ 神のみ前でよみせられたからこそ、彼はこの世の腐敗から〔天の国へと〕移されることになったのです。しかし、サロモン王を通して聖霊は、神によみせられた者が、この世に長くとどまって世の腐敗に汚されないように、より早めにこの世から取り去られ、より速やかに解放されることを教えています。「悪が心を変えてしまわぬよう、彼は天に召された。彼の魂は御心に適ったので、主は急いで彼を悪の中から取り去られた。」²⁸⁾

また詩編の中でも、霊的な信仰をもって神に己を捧げた魂は、神のもとへと急ぐことが、次のように書き記されています。「あなたのいますところは、どれほど愛されていることでしょう。主の庭を慕ってわたしの魂は絶え入りそうです。」²⁹⁾

24. この世に長くとどまることを望む者に対しては、この世は楽しみを与えません。へつらい欺くこの世は、地上の快樂という誘惑でもって誘うのです。さらに、この世はキリスト者を憎んでいるのに、どうしてあなたは自分を憎むものを愛するのですか？ どうしてあなたは自分を購って、しかも愛して下さるキリストに従わないのですか？ ヨハネはその手紙の中で、私達が肉の欲に従うことなく、またこの世を愛することもないように、声を張り上げて言っています。「世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にはありません。なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです。世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。しかし、神の御心を行なう人は永遠に生き続けます。」³⁰⁾

愛する兄弟達よ。むしろ私達は、健全な心と堅固な信仰、強固な徳を備えて、すべて神の御心に従う者となりましょう！ 死の恐怖を退けて、死の後に続く「不死」について考えるようにしましょう！ 私達は自分の信じていることを示しましょう！ 親しい者の死を嘆き悲しむのではなく、また自分の召される日が到来した時には、私達を呼び寄せて下さる主のみもとへ、ためらうことなく、喜んで行こうではありませんか！

25. 神のしもべたちは常にこのように行動しなければなりません、特に、今……この世が腐敗し、猛威を振るう悪の嵐に圧迫されている今こそ、なおさらそうしなければなりません。それは、すでに「ひどい事態」が始まったのだと見て取った私達が、「よりひどい状態」が迫っていると悟って、いち早くそこから退くならば、それが一番の得策だと考えるためです。もしも、あなたの家の壁が、古くなったために揺れ出したり、屋根ががたがたと震え、家全体が弱り果て、建物の老朽化も進み、もう崩壊寸前の状態だとしたならば、あなたは全速力でそこから離れるのではないのでしょうか？ もしもあなたが航海の途中で、荒々しい暴風に猛り狂う荒波により、この先、難破しそうだともってわかったならば、素早く港に逃れるのではないのでしょうか？ ごらんなさい、この世は変わり廃れ始めました。ものが古びたために崩壊していくのではなく、終局を迎えたことによる崩壊であることを証明しています。そこであなたは、この世からいち早く取り去られ、差し迫っている崩壊と難破と災難から免れることを祝賀しないのですか、神に感謝しないのですか？

26. 愛する兄弟達よ。私達はこの世を捨てたこと、そしてこの世ではほんのしばらくの間だけ客人として旅人として暮らしていることを繰り返して思い起こし、考えていなければなりません。私達一人ひとりがその住処を定める日……この地上から取り去られ、この世のわなから解放され、楽園である御国に呼び戻す日……を喜び迎えるようにしましょう！ 異国を旅しながら、母国へ帰ろうと急がない者がありましょうか？ 親しいもののもとへと航海をしながら、一刻もはやく愛するものを抱擁するため順風を

期待しない者がありませんか？ 私達の母国、それは楽園であると私達は考えています。太祖達を自分の両親としてもう持ち始めているのです。私達の母国を見るために、また両親に挨拶をすることが出来るために、私達はどのように急いで走って行こうとしないのでしょうか？ そこでは、私達の親しい人々が沢山私達を待っています。両親、兄弟、子供達の群れが私達を待っているのです。彼らはすでに救われて安全な状態にあって、私達の救いをひたすら気づかひながら、待ち焦がれているのです。彼らと再会し抱擁するためにそこに行くことは、彼らにとっても私達にとっても、どれほど大きな、共通の喜びでしょう！ そこで、もはや死の恐怖なしに「味わう」神の国の喜びは、どんなものでしょう！ 永遠に生きる幸福は、なんと最高で絶えざる幸せなのでしょう！

そこには、栄光ある十二使徒達が、群れをなしています。そこには、歓呼する預言者が、数多くいます。そこには、数え切れないほど多くの、殉教した人たち……苦闘と受難の勝利の栄冠を載いた人たち……がいます。また克己・節制の力によって肉の欲・からだの欲に打ち勝ったおとめ達も、凱旋しています。貧しい人々に食物を与え正義のわざ「施し・慈善」を行い、それによって報いを受けた憐れみ深い人々もいます。そして、彼らこそは、主の戒めを守って、この地上の財宝を天国の宝に置き換えた人々なのです。

愛する兄弟達よ。熱烈な希望をもって彼らのもとに急ごうではありませんか！ 彼らと早くひとつになること、キリストのもとに早く行くことが出来るように願おうではありませんか！ どうか、神がこのような私達の考えを見守って下さいますように！ どうか、キリストが心と信仰に基づくこの志を顧みて下さいますように！ キリストのことをより深く熱望していた者に、その愛の報いをより一層豊かにお与え下さいますように！

(完)

注

- 1) ルカ 21, 31
- 2) ローマ 1, 17
- 3) ルカ 2, 29—30
- 4) ヨハ 16, 20
- 5) ヨハ 16, 22 以下
- 6) ヨハ 14, 28
- 7) フィリ 1, 21
- 8) シラ 2, 1
- 9) シラ 2, 1 ; 2, 4-5
- 10) ヨブ 1, 21
- 11) ヨブ 2, 10 b
- 12) ヨブ 1, 8
- 13) トビ 2, 14 参照。新共同訳では後半の部分が「あなたはそういう人なのです。」と
なっている。
- 14) トビ 12, 11—15
- 15) 民 17, 25 b
- 16) 詩 51, 19
- 17) 申 8, 2
- 18) 申 13, 4
- 19) II コリ 12, 7—9
- 20) シラ 27, 5 参照。新共同訳では「陶工の器が、かまどの火で吟味されるように、
人間は論議によって試される」
- 21) 創 4, 5 参照
- 22) 黙 2, 23 a
- 23) I テサ 4, 13—14
- 24) ヨハ 11, 25—26
- 25) フィリ 3, 20—21 参照。キプリアヌスは二つの節を一つに合わせている。
- 26) ヨハ 17, 24
- 27) 創 5, 24
- 28) 知 4, 11 a ; 14 a
- 29) 詩 83 2—3 a.新共同訳では、詩 84—2—3 a.
- 30) I ヨハ 2, 15—17

A study of Church Fathers : S. Caecilius Cyprianus (6)

—The pastoral instructions *on the Mortality*—

A translation with notes of
St. Cyprian's *De Mortalitate*.

Kiyoshi YOSHIDA

After the Decian's persecution (250-251), a pestilent disease took possession of many provinces of Africa, and especially Alexandria and Egypt, and many people in the Christian society were shaken by the disease.

As soon as Cyprian became aware this situation, he wrote *De Mortalitate* (*On the Mortality*) about 252. He pointed out that wars, famines, earthquakes, pestilences and all the kind of afflictions had been foretold by Christ ; he taught them that the mortality or plague was not to be feared, in that it leads to immortality. It is not wonderful that the evils of this life are common to the Christians with the heathens, since they have to suffer more than others in the world, and thence, after the example of Job and Tobias, there is need of patience without murmuring.

In chapter 26, the last chapter, Cyprian invites us to consider and reflect that we have renounced the world, and are in the meantime living here as guests and strangers. Let us greet the day which assigns each of us to his own home, which snatches us hence, and sets us free from the snares of the world, and restores us to paradise and the kingdom. —May the Lord Christ look upon this purpose of our mind and faith, He who will give the larger reward of His glory to those whose desires in respect of Himself were greater !